第５回屋久島フィールドワーク講座報告書　（２００４年３月）
上屋久町・京都大学理学研究科２１世紀 COE 発行

屋久島フィールドワーク講座・人と自然班報告

# 「屋久島最高の村・石塚の今――過去に学んで未来を見つめる」

参加者：荒田俊史（屋久島高校）、納谷直子（京都文教大学）、萩原理恵子（広島大学）、原あゆみ（筑波大学）、山口佳子（愛知学院大学）
講師：安渓貴子（山口大学非常勤講師）・安渓遊地（山口県立大学教員）
チューター：金井塚務（広島フィールドミュージアム会長）

## Ⅰ　活動のあらまし

私たち「人と自然班」は屋久島における人と自然のかかわりの過去と現在を、五感のすべてを駆使して学び、それにもとづいて望ましい未来についてできるだけ豊かにイメージするということを目標にしています。そのため、かつて人々が暮らして場にでかけ、現在進行形で遺跡ができつつある現場をフィールドとして学ぶことから始めます。そこで感じたこと、見たこと、考えたことをより深く理解し、自分のものとするために、関係者のお話をうかがい、さらに屋久島の人と自然についての全体的な見通しにつらなるお考えをお持ちの方の教えを請う、という手順で学んでいきます。これまでに、西部林道ぞいの半山集落跡（第１回屋久島フィールドワーク講座）、川原集落跡（第３回）の調査に引き続き、昨年（第４回）は、もっとも大量の屋久杉が伐採された小杉谷集落跡を調査対象とし、今年（第５回）は小杉谷からさらに奥まった、海抜高度が屋久島では最高に位置していた石塚集落跡を学習の舞台にしました。

１日目は上屋久町の環境政策課の木原さんのお世話で翌日のキャンプの準備をし、その後、小瀬田で屋久島の雑誌『季刊・生命の島』の編集をされている日吉眞夫さんを訪問しました。午後は安房にでかけ、小杉谷で２０年あまりをすごされた堀田優さんのお話をうかがいました。

２日目は環境政策課の木原さんの案内で、荒川口からトロッコ道を歩いて小杉谷の手前まで歩きました。そこまでは雨が降り、足下の枕木が濡れてすべりやすく、屋久島らしい山歩きとなりました。トロッコ道が石塚集落跡に向かって分かれてすぐ左手にある大山神社は、小杉谷・石塚両集落の人たちを守っていた神社ですから、石段を登って参拝し、拝殿を掃除してフィールドワークが順調にいくように祈願しました。大山神社をあとにするころには雨もあがり歩きやすくなり、翌日まで晴天にめぐまれました。

石塚集落はトロッコ道沿いに家のあとが延々と伸びている集落で、集落跡を歩くうちに、集材用のヘリポートに出くわしました。またトロッコに乗って作業から帰る人たちにも出会いました。歩くことで石塚集落のおおまかな形と家々の跡を見ることができました。その後、集落の中程にある広場を中心に、遺物の調査を行いました。夜は上屋久町役場の塚

田英和さんがともに泊まって、屋久島の人々が生きてきた知恵の世界のお話をしてくださいました。

３日目は石塚集落のなかで、おおまかな集落の配置を確認したうえで、家を決めて屋敷跡などの遺構調査を行いました。昼すぎに、石塚集落を後に小杉谷経由で荒川口まで歩き宿舎のある一湊へ戻りました。

４日目はまず石塚集落跡のフィールドワークのデータ整理をし、のち、かつて石塚集落に住んでおられたという大脇さんと日高さんのお話を、松峯の公民館でうかがいました。石塚集落跡で自分達が見て気づいた疑問にも答えていただきました。そのあと安房の土埋木の貯木場を見てから、土埋木の加工現場と製品を売る店の見学をしました。屋久島を広く把握するために南まわりで西部林道を見て帰りました。

５日目はまずまとめをした後、小瀬田集落に柴鐵生さんを訪ねお話をうかがいました。夜は上屋久町のシンポジウムに参加しました。

６日目はまとめと、発表会をしました。

あわただしいスケジュールの中で、急にお話をお願いしたにもかかわらず、快く応じてくださったみなさま、石塚のもと住民の方のお話がきけるようにアレンジしてくださった安房の前野政人さん、ボランティアのチューターとして広島から駆けつけてくれた金井塚さん、上屋久町役所の塚田さん・木原さんをはじめ、私たちの勉強が有意義なものとなるように有形・無形の援助をしてくださったすべての方々に心から感謝いたします。

（安渓貴子・安渓遊地）

## Ⅱ　石塚集落と小杉谷の現地調査

### A　石塚集落と小杉谷集落

石塚は、よく知られた小杉谷とならんで屋久島国有林開発（営林署による屋久杉搬出）の拠点として開設された集落で、営林署の職員とその家族が生活していた。小杉谷が安房川の左岸（海抜 640 メートル）に位置するのに対して、石塚はやや上流の右岸（海抜約 800 メートル）にあった。現在、この二つの集落は廃村となっており、石垣、家の基礎や当時使われていた様々なモノが遺物として残されている。

石塚が大正 10 年（1921 年）、小杉谷が大正 12 年（1923 年）に開設され、ともに昭和 35 年頃が最盛期であった。当時としては他より早く荒川ダムの水力発電による電気を使用していた集落で、一時は人口が多く、村の子供たちが通う小中学校が小杉谷に開校されていた。しかし、伐って搬出できる屋久杉の減少や、一方ではじまった屋久杉の保護運動の高まりなどにより、石塚集落が昭和 43 年（1968 年）に、小杉谷集落が昭和 45 年（1970 年）の 8 月に閉山となった。村で暮らしていた人たちは、家財道具、家の柱や板壁などの建築材料ももって山を降りたという。山を降りるにあたって、小杉谷は集落地跡に杉を植林したが、石塚は植林をしなくても自然に回復すると考え、植林はしなかった。

そして現在は、小杉谷は植林された杉が育ちスギの人工林になり、石塚は広葉樹にスギをまじえた二次林になっている。

Ｂ　石塚集落の現地調査

石塚集落跡地はトロッコの軌道の両側に当時の家が点々と分布していた。それぞれの家の跡地にはたくさんの遺物が転がっていた。当時使用されていた生活用品や木材の搬出に使われたものである。しかしそれらは厚い苔に覆われていることが多かった。また遺物はトロッコの軌道をはさんで谷側に多く見られた。

電気に関係する物が多く、碍子（がいし）、トランス、電気メーター、シーリングなどがあった。昭和 30 年代に電気が豊かに使える状態であったことがうかがえる。

ガラス製品では、ビール瓶、そして非常に多くの一升瓶が見つかり、お酒に楽しみを見いだしていたようだ。ラムネ瓶とビー玉はラムネを飲んでいた子どもがいたのだろう。すりガラスが家の敷地の隅にあたる土手に立てかけてあり、ガラス捨て場かあるいは予備のガラス置き場だったのだろう。

有田焼の茶碗やスレート瓦も見つかった。瓦葺きの家であったことを物語っている。

金属類も多く、長さ約 120ｃｍのネジ締め、ボルト、穴が等間隔に穿かれた細長い鉄板、レールなどがあり、トロッコ道沿いにつくられた国有林開発の拠点の地であったことをこれらは物語っている。また、針金ハンガーの上部分、アルマイトの玉杓子、アルミの両手鍋など生活感あふれる品もあった。白色の長いパイプも見つかり、これは水道管として使用されていたものではないかと考える。

プラスチック素材のものも多く、定価 500 円の資生堂ビューティーテーク、半分に割れてしまった化粧品ケースなども見つかった。

遺物としての生きている植物として、当時の人が植えたと思われるムクゲの木が一本あり、人気の絶えた家の跡で大きな真っ白い花をたくさん咲かせていた。

Ｃ　石塚集落内の家の復元

トロッコ軌道をはさんで山側と谷側に屋敷跡があるのだが、谷側には遺物が多い。その理由として、集落に人が住まなくなった後にキャンプ地として利用された形跡があること、また谷側は遺物が山側から転がってきて、もともとその場になかったものが遺物に混ざってしまっている場合が考えられる。このように、谷側は遺物が人為、自然の両方の要因で移動してしまっている恐れがあるため、山側に建てられた屋敷跡を測量し、家の復元を試みることにした。

測量により、一軒の家の間取りが浮かび上がった。家の基礎として置かれたと思われる石の配置から水場と居住スペースが分かれていたと考えられた。水場は、台所と風呂で、水と火を使う場所である。だから火事を避けるために分けられたのではないだろうか。

また、トロッコ道に降りる階段状のものが二箇所（勝手口と考えられる場所と居住スペー

スの近く）から見つかった。玄関と勝手口のような使い分けがされていたかもしれない。

その屋敷跡の水場から石造りのカマドと風呂跡が見つかった。風呂跡は比較的多くの家で見ることが出来たが、あまり多くない私たちの調査範囲ではカマドはここ一軒だけであった。苔に被われていたとはいえしっかりと形が残っている。当時の住宅地図を石塚で暮らしていらっしゃった日高さんと大脇さんにうかがうと、当時の石塚集落では普通ガスコンロ、電気コンロを使用したという。私たちがカマドと見たてたものの写真をお見せしたところ、当時の住宅地図を確認した上で、私たちが復元しようと試みたその家は豆腐屋であったことがわかった。豆腐原料の大量の大豆をやわらかく煮るには火力が長時間必要なため、ガスや電気コンロでなくカマドで煮ていたのであろう。

居住スペースの端にあたるところに柱らしき丸太が横たわっていたが、形が残っていた丸太はこれだけだった。これも日高さんと大脇さんによれば、山を下りる時に、建材も払い下げを受けて解体してトロッコに乗せて運び、移住先にもとと同じ基礎を築いて家を再建したのだそうだ。

トロッコ道沿いの斜面には石垣が組まれ、隣の家とは 10 センチほどの段差によって土地が仕切られていた。また隣の家からはトイレ跡がみつかり、その家の裏にあたる崖沿いには小さな人工池が掘られていた。

屋敷跡の横を流れる南沢の支流には大量のゴミが投棄されており、洗濯用の漂白剤のハイターやガラス瓶、肥料袋、お菓子（駄菓子）の包みなど生活感あふれるゴミが多かった。当時ここは家庭から出たゴミを捨てる場とされていたのであろう。

（山口佳子）

## Ⅲ　石塚で暮らした大脇さん、日高さんにお話をうかがって

2003 年８月 20 日、21 日の石塚集落跡の調査を終えた私達は、石塚集落で実際に生活なさっていた大脇耕治さん、日高秀麿さんにお話を聞かせていただいた。お二人は私たちのたくさんの質問、疑問に一つ一つとても丁寧に答えてくださった。以下はその記録である。

### A　屋久島で最高の仕事

大脇さんは昭和 13 年生まれで昭和 37 年（24 才）から 43 年（30 才）まで石塚で暮らし、昭和 43 年から 45 年まで小杉谷におられた。よい仕事を求めて、種子島から屋久島に来られたそうだ。日高さんは昭和１４年生まれ、屋久町の麦生出身で、昭和 32 年（18 才）から昭和 43 年（29 才）まで石塚におられた。当時、小杉谷や石塚での仕事は屋久島で最高の仕事であった。営林署の仕事は、伐採班、集材班、造林班、運財班、保線班と分かれており、お二人は造林班で、多いときは一日に 300 本もの苗木を植えていたそうだ。苗木は安房で 30cm くらいまで育てたものを植えていたという。また林婦会というものがあり、女性が臨時で苗木の植え付けなどを行っていた。労働日数は、月に 24 日間であった。毎年 9 月 16 日は、神官を呼んで従業員全員で祝う山の祭りがあった。

B　電化製品を使った暮らしだった

石塚での暮らしは、屋久島で一番早くから電気を使用していた。電気は営林署が水力発電していた。だから電灯はもちろん、電気洗濯機があったり、炊事には電気コンロとガスが使われていたりと、当時の最先端技術の電気製品を使って暮らしていた。水はそれぞれの家が山水をパイプで引いて、汲みに行かなくても各家で使えるようにしていた。お風呂は薪であったが、小杉谷には公共の電気風呂があったらしい。その電気風呂は、「入ると体が本当にビリビリして危なかったんだよ。」とお二人は笑って話しておられた。

C　豆腐やさんのかまどだった

ところで、お二人のお話から炊事は電気コンロとガスで行われていたことがわかったのだが、先にも述べたように、調査の際、一軒の家にだけ竈（かまど）があり、石塚集落での現地調査の時から私達は疑問に思っていた。お二人に聞いたところ、「そうそう、そういえばそこは豆腐屋だったんだ。」と思い出してくださり、謎を解くことができた。すると、同じフロアに落ちていた大きな鉄の機械は、大豆をすり潰すためのものだったと理解されるのである。

D　楽しみは酒と買い物

石塚での生活の楽しみはお酒と賭け事であった。集落に飲み屋などはなく、お互いの家に招きあって飲んでいたという。また、仕事が休みの日曜日に肉や魚の買出しのため安房に行くことも楽しみの一つだった。一方、苦労したことはなんと言っても医療関係だった。石塚には医者はおらず、お産のときもトロッコで下までおりなければならなかった。また葬儀は安房で行なった。屋久島の外から来た人は安房の春田浜で火葬されたが、屋久島の人はだいたいは土葬だった。

E　屋敷跡には何も植えずに離村した

大脇さんは、昭和 37 年に結婚するまで、造林寮という独身寮に住んでおられた。そして結婚されて昭和 43 年に石塚集落から小杉谷集落に移り、昭和 45 年まで家族で住んでいた。石塚から小杉谷に移る時は屋敷跡に何も植えずに出たが、小杉谷から山を下りる時は植林や間伐を行ったらしい。理由は、石塚は森の中という感じだったが小杉谷は宅地で、山に返そうという気持ちだったからであった。

最後にお二人に、山から下りることになったときの気持ちを尋ねた。すると、口をそろえて「そりゃあうれしかった。」とおっしゃった。「楽しかったことはあまり思い出さない、苦労が多かった。」そう話すお二人の様子に生きることの厳しさを垣間見た気がした。

（納谷直子）

# Ⅳ　土埋木について

A　土埋木とは

屋久島の自然休養林を散策すれば、巨木のそこかしこに、苔に覆われ草木の生い茂った古い切り株をみることができる。これらの切り株や捨てられた倒木は、直射日光をさえぎられて多湿な原生林の自然環境に守られ、表面が腐っても樹脂分の多い内部は朽ちることなく、むしろはるかな時の流れによって色合いも美しく、熟成させながら後世への贈り物として残された。これが屋久島の土埋木である。

B　土埋木を知ったきっかけ

私達は廃村調査を行うために石塚集落跡地でキャンプをおこなった。その場所で、人が 10 人は入れるほどの大きさの杉の切り株を見つけた。私たちはその切り株の中に屋根がわりの大きな空間を見つけ、雨にぬれないようにと荷物をその中に置いた。それほどの大きさの切り株であった。切り株の上やまわりには何本もの新しい木が生えており、生えた木々がすでに大きく育って見上げるほどの大きさになっている。集落全体を把握するために、トロオコの軌道に沿って奥へと跡地を進んでいくと、ヘリポートや膨大な量の新しいワイヤーの束があった。それらは切り出した土埋木を運ぶためのものだと聞いた。さっき見たあの立派な切り株も伐られるかもしれない。あれが伐られ掘り出されたら、森林に大きな穴があくだろうと想像できた。私達はとてもショックを受けた。このことから、土埋木について知りたいと考えるようになった。

C　土埋木の今と昔

土埋木は生立木と同様に、伐採地点と集材地点を結んだ空中ケーブル（索道）で一ヵ所に集められ、出荷されてきた。しかし最近は手近なところの資源が減り、索道では採算の合わない険しい奥地まで入りこまなければならなくなった。これがヘリコプター導入の背景である。奥地へ、奥地へ、探しながら進まざるをえない土埋木の生産量はジワジワと減少しており、先細り現象はこれから先も避けられそうにない。生産減に加えて、材質の低下も目立ってきている。これまで伐採した場所での二次集材が増えてきたのが大きな原因である。石塚や小杉谷に集落があった当時は高級品だけを根株を残して出していたが、今は根こそぎ全部抜かれている。また現在の特徴としては、森の中にポツンポツンとあるのをヘリコプターで行ってその土埋木のみを抜くので、植林の必要がないことがあげられる。

D 土埋木のこれから――保続こそが林業

お話をうかがった柴鐵生さんの言葉に、「林業は保続」というものがあった。木を植える、育てる、伐る、植える……このサイクルこそが林業であるということだ。しかし、土埋木は成長するはずのない資源で、保続することはできない。つまり、いつかは終わっていく

資源である。いかに長く細く利用していけるかが重要になる。その工夫として工芸品はテーブルなど大きいものではなく、箸やキーホルダーといった小さいものにし、加工品を屋久杉よりも育ちやすい広葉樹に切り替えていくことが検討されている。

E　人と自然のかかわりの歴史を語る土埋木

フィールドワーク講座最終日の研究発表会で、「土埋木はどこにあるべきなのか、あなたたちにとって土埋木の価値は何か」と会場から尋ねられた。そのとき私は、自分の目で見て、触ったあの立派な切り株が切られてしまうかもしれないことが嫌で、土埋木は森にあるべきだと強く思った。けれど、屋久杉が保護されているなかで土埋木を加工するしかない人もいること、人が生活するということを考えると、私の感情論はとても薄っぺらなものに感じた。しかしその中で班員の一人が、「森の中にあるべきだ。土埋木は伐採の歴史を物語るものだから。」と語った言葉にはっとした。土埋木は屋久島での人と自然の関わり合いの歴史を物語っている歴史的資源でもあるのだ。あの切り株は存在することで、屋久島を訪れた人々にも私達が一週間学んだことを訴え続けてくれるのだろうと思う。

（納谷直子）

## Ｖ　柴鉄生さんのお話

2003 年８月２３日、私達は昭和４０年代から屋久島の杉を守る運動の中心となって活動されてきた柴鐵生さんにお話を伺いました。柴さんは現在、廃棄物の中間処理事業と民宿『屋久の子の家』の経営をされています。何故、町議会議員となり屋久島を守ろうと思われたのか、その経緯を語ってくださいました。

もともと僕は、一緒に活動をしていた兵頭さんと比べてあまり島や山のことには興味がありませんでした。屋久島の定時制高校を卒業し、何か自分が生まれ育った永田の役にたてばいいと東京の大学に進学はしたものの、勉強もせず毎日を過ごしていました。そんな折に兵頭さんと出会い、『屋久の子の会』が結成されるまでの約二年間、会合を開き、島についての勉強をしました。ある時、屋久島から「屋久島高校に体育館を作りたい」と寄付の要請があり、何故、高い価値のある屋久杉を売って資金源にしないのか、漠然と疑問を感じていました。

昭和４１年、岩川貞次さんによって大岩杉（のちの縄文杉）が発見され、翌年元旦に「よみがえる縄文の春」としてマスコミに大々的に報道されました。何千年もの命を経た杉の木を切るのはおかしいと各地から屋久杉の伐採に対して反対の声があがり「屋久島の会」といった組織が関東、関西で７つか８つ結成され、活動が展開されていました。僕自身も東京で署名運動を行いました。

しかし、島民にとっての屋久杉は何なのか、観光資源からも屋久杉を守るべきなのか、

と島民からの視点が欠けており、そのことに疑問を感じた兵頭さん、中島さんと僕で昭和４３年に一時的に島に帰ることにしました。

島民と屋久島の事を考えようと意気込んでいたものの、屋久杉の保護運動は島民の間では知られておらず、永田の青年は無関心でした。９月に東京に戻りましたが、高校の同級生に、「東京にいながら島のこと訴えるのはおかしくないか？島に帰ったらそのことも許すが」言われたこともあり、東京にいる意味がなくなったと感じたので昭和４４年４月に屋久島に帰りました。

昭和４５年、兵頭さんも帰郷しましたが、島での活動はなかなか思うようにはいきませんでした。私は永田小学校の校舎を払い下げてもらい、「屋久の子の家」という民宿をオープンさせ、なんとか活動拠点にしました。

その年の統一選挙に私は「原生林の保護」という目的を内に秘め、上屋久町議員に出馬し当選しましたが、保護のための活動を起こせない毎日をすごしていました。当時の屋久島は木を切る産業が島をささえており、私の父も含めて多くの島民が山の仕事に従事していたのでなかなか「屋久杉の保護」の話を切り出せなかったのです。

昭和４６年ついに兵頭さんの奥さんに「私はあなた達を信じて屋久島について帰ってきたのに何もしていない。あなた達は精神的な詐欺師だ」とおこられ、目がさめました。でも今、当時を振り返って考えてみると、帰島後すぐに活動をしていても上手くいかなかっただろうと思うんですよ。兵藤さんが経営する合同建材の仕事を通じて島の人との人間関係ができ、それが後の活動の助けとなったのだから。

昭和４７年、「屋久島を守る会」が結成され兵頭さんが会長となりました。兵頭さんと僕の仕事は上手く分担されていたと思います。兵頭さんは会長として表に立って運動や財政面を支えていた一方で、僕は実際に山に入って交渉するという実質的な活動を行っていました。その後、瀬切川流域の原生林の保護を訴えた兵頭さんも議員となり「守る会」の会長は長井三郎さんへと引き継がれました。僕と兵頭さんが訴え続けたおかげで議員の中でも「原生林の保護」は常に問題でありつづけました。

昭和５４年、調査の結果、４５年に起きた土石流災害は伐採のあり方が問題であったとの結果が出ました。５７年からの伐採計画はこの経験が活かされていない、もう一度見直す必要があると思い、計画を見直すように営林局に訴えましたが「冗談じゃない、一度決まったことについて話を蒸し返すなんてルール違反だ！」と全くとりあってくれませんでした。また、同席していた当時の上屋久町長も木の伐採で生計を立てている人から多くの支持を得ていたので原生林を残す必要はないと考えて、沈黙を守りつづけていました。

確かにルール違反ですが実際に山に入ってみると、とてもいいところなんです。僕は我慢できずに「プロセスにこだわってルール違反だなんていうな！おれはチンピラにすぎないけれど絶対にこの森を残すぞ！」と言って部屋を出ました。

昭和５６年の１２月のある日曜日、僕は、議員の斎藤さんと研究者の三谷（正純）さんらの三人をさそって初めて瀬切川の原生林に行き３，４キロ歩きました。議会のなかでは

常に原生林がテーマとして取り上げてきましたが、今までは私は伐採現場の視察しか行ったことがなかったのです。森のあまりのすばらしさに瀬切川を渡ったところで思わず「三谷君、この森は残るよ」とつぶやきました。今まで面白くなかった気持ちが初めて高ぶり、一時間くらい語りました。

瀬切川流域の原生林を保護する明確な目的がないと、人々に訴えることができない。そこで昭和５７年１月１６日に開かれた、屋久島の理解を深める教室で、保護運動のスローガンを「垂直分布」に決定しました。議会はその後、二回森を視察に行きましたがそれ以上は動いてはくれず、後は「屋久島を守る会」の手にかかっていました。日吉さんはマスコミを回り、僕は国会議員に訴え、ついに瀬切川の問題を国会で取り上げてもらいました。

２月２５日、突然僕は議員であった村上さんに東京に来るように言われました。呼び出された部屋には林野庁の職員と鹿児島の役人がいました。「もう一度伐採計画をみなおしてくれないか？」村上さんが切り出しましたが、「そんな気は毛頭ない」との返事でした。「ああそう。それなら、これから僕は柴くんとムシロ旗をあげるよ、それでもいいの？」と村上さんが言うと、急に態度が変わって「どうもすみませんでした。もう一度検討してみます。」と言われました。それで村上さんは「もう一度上屋久町の議会で伐採禁止の決議をしろ！」と僕に言われました。

でも上屋久町の伐採方針はいっこうに変わらず全く動きませんでした。僕達は東京で再び計画見直しの請願活動を行いました。とにかく必死でした。ある時、ホテルに帰ってきてラジオのスイッチをいれると「日本の林業が消えることについて憂慮している学者が会合を開く」という内容が流れてきて、そこの会合に飛び込みで参加して協力を要請する、なんていう一幕ともありました。

昭和５７年３月２４日、ついに伐採の見直しを求める請願に対して採択をすることになりました。しかし多数決をとる委員には林業関係者が多く、明らかに僕達は不利でした。そんな時、今まで一度も山を見に行っていなかった議員のひとりが気づいて「半年前に決定していた決議を変えるのはおかしくないか？」との声をあげてくれたんです。

実はその前年の昭和５６年の６月、霊長類研究所からの「瀬切川流域の原生林を切らないでほしい」という請願が委員会にとおっていた事をみんな忘れていたんですよ。当時はそんなに重要な問題ではないと簡単に通していたんですね。こうして生活を守る会（伐採推進派）の請願書の中身を、森を残す方針に変え、全員一致で請願は可決されました。

瀬切川の保護運動を展開する中で、僕の親父も含めて島の人から裏切り者と言われました。だから「どこの場にいって話をするときも負けてはいけない」と常に気が張っていたため、毎晩人と話をする夢を見るほどでした。個人的に嬉しかったことは瀬切川が守られると決まったちょうどその日に娘が生まれたことかな。

それから 3 年経った時、村田さんに『木を植えた男』という本を三冊プレゼントされました。そのときに「林野庁内では瀬切の森は林野庁の塚本さんが残したことになっているよ」と聞かされたんです。実は、塚本さんは、私とやりあった１月 16 日以後に一人で瀬切

の森に入っていたのです。これを聞いて僕はいい話聞いたなぁと思った。なぜ瀬切の森は残ったか……塚本さんも実際に森に行って森から感動を受けて動かされたんだね。僕らは瀬切の森が残ったのは僕らの努力としてやったそのおかげと思っていたけど、やはり森の力に突き動かされて動いたんだなぁと思った。僕らはみんな森の遣い人として動いたのだとね。

結局はマスコミも、切る側の人間も、私たちも、議員もみんな屋久島という大きなご縁の中にいるんです。森は森自身の持っている力でギリギリ残ったのだと思う。瀬切の森を残すエネルギーは屋久島の森から頂いたのだと思っています。

――山を伐ることについてどう思われますか？

３００年後はどうなっているのか……もしかしたらもう一度ものすごい森になっているんじゃないか、長い時間のおかげでまたすごい森になっているんじゃないかと思う。その時もまた、心から感動する人もいれば、伐ろうという人もいるだろう。ただ大切なことはそのときに、この瀬切に関する１０年以上にわたる葛藤の歴史が肥料になるのではないかと思う。そのためにも今その１０年をきちんと伝えなくてはならないと思うんです。

――石塚についての質問です。守らなくては３００年後にいい森にはならないのではないでしょうか？土埋木を運び出すためのヘリポートもできていましたが……。

資源としての土埋木は長くて五年分しかないでしょう。ヘリ集材ももうできないだろうと思います。材質も年々悪くなり、その分加工費も高くつき、経済的にはもうギリギリだから。土埋木には大きな矛盾がある。林業とは本来保続するものであり、多様な価値を保続しながら木を植えて育てて切ることである。だけど土埋木は保続できないものです。3000 年サイクルならできるけれど。1 年で 3000 年分の 1 くらいを出すというなら可能だが。短いサイクルではとても無理です。

土埋木について語るのは正直しんどいです。特殊林産物という扱いだから作業計画が明らかにされないのです。昭和 40 年ごろから伐採の事業量が縮小されて林業収入が減り、それから土埋木の出荷量が増加しました。加工業者が鹿児島の業者と結託していたから地元は反対できなかった。もともと土埋木の保存量も不明だし調査自体がいい加減です。林野業は再生産可能なものに対してしか責任がもてないはずなのに、その辺をきちんと議論していないと思います。

――最近、伝統の岳参りを復活されたということを聞いたのですが。

2 年前から復活させました。昔は私の集落でいえば永田のコミュニティを山への信仰心が束ねていた。またふたたび岳参りをすることで山に対する畏敬の念を実感し、山を守ることに繋がると思っています。

（原あゆみ・萩原理恵子）

## Ⅵ　山と人との関わり方（カラダで感じ学んだこと）

屋久島で登山をする時に、「伝統的な方法」で山に入ることを教えて頂きました。山はカ

ミの領域であるとされています。そこに入らせていただくということで「おじゃします」とカミに挨拶をします。方法は様々で、例えば「ごめん、ごめん」と言ったり、柏手を打ったり、あるいは「ごめじょの木（和名ハドノキ)」を振り回しながら歩くといった方法があるそうです。私たちは「欲ではございますが、みなが無事帰ってこられますように」と山のカミにご加護をお願いしました。そのおかげか全員無事で楽しい時間を過ごすことができました。

登山の途上で大山神社にお参りしました。ここは営林署が主催して石塚・小杉谷の合同で、山の神祭りが行われていた神社です。山の神祭りとは 1・５・９月（正・五・九）の 16 日に行われていたお祭りです。特に 9 月 16 日は特別な日で木を切るための刃物にも触れてはならないと言われていたそうです。屋久島だけではなく全国共通に行われていたお祭りです。

次に山の中で安全に一夜を過ごす方法を教わりました。カミガミの領域である山で一夜を過ごさせていただく……。なんて贅沢なことなんでしょうか。そのためにはカミガミに宿をお借りしなければなりません。その方法を上屋久町役場の塚田英和さんに教わりました。キャンプをする場所の周囲 4 箇所に酒・米・塩を捧げ「今宵一夜のお宿をお借しください」とお願いします。これは宿泊する場所の周囲に結界を張り、そこで過ごす間は物の怪などからも守っていただくという意味があるそうです。そのせいか夜の野外トイレも恐れずに一人で行くことができました。なんだか護られているという安心感がずっと私の傍にあったような感じがしました。

今回のように自分の体験として山に対する畏敬の念を感じる機会は非常に貴重な体験でした。文献や人の話として聞くのではなく、自分たち自身が生身の人間として自然の中で何を畏れ、何に感謝するのかが問われる場面にはなかなか遭遇できるものでないからです。そういった機会を与えてくださったすべてにここで感謝するしかありません。

屋久島から広島に帰って

屋久島から帰って 2 ヶ月の月日が流れました。屋久島に行って変わったこと……。

毎日毎日太陽に見守られ、都会の植物達と共に時間を分ち合い、遠くの山に励まされ、河に癒される。そんなことを以前よりももっと純粋に感じるようになれました。前はそんなことを考える自分はおかしいんじゃないだろうか、ただ寂しさに溺れているだけなんじゃないだろうかといささかネガティブにとらえていました。しかし、山に河に海に畏敬の念を抱きながら培われてきた生活・文化というものに自分自身が出会い、学びを得た今となっては、その感覚が何よりも大切ないとしいものに思えるのです。

私達人間は集団で生活（集落を作ったり、共同作業をしたり）していても心の本当の部分では孤独な生き物だと私は思っています。その孤独を単なる孤独で終わらせるのではなく、開かれた孤独にして孤独と孤独を繋げるもの、それが自然であり、カミだと私は思うのです。その自然を感じる感受性、カミを畏れる謙虚さを我々が失ったときに人間は本当

に救いようのない孤独に陥り、自己破壊が始まる（間接的にも直接的にも）のだと私は感じています。

私が感動するとき、生きていてよかったと思うときとは人間がいかに弱い存在であるかを教えられる瞬間です。屋久島ではそんな贅沢な瞬間が与えられました。私は運良く、屋久島で講習終了後、海から頂いた海水から塩を作る経験をさせていただきました。幸か不幸か潮汲みの時には海が荒れていて、私が海水を頂きに行くと身長よりも高い波が私を出迎えてくれました。ただ海水を汲むだけ、それもただ塩を作るためだけに……なのに私は自分が海に呑みこまれるという恐怖感を感じました。恐怖であると共に至福の時でした。人は塩を作るときにすら命を落としかねないほど弱い生き物である、海を前にして人などなんとも脆弱な存在である、そんなことを体で感じた瞬間、なんともいえない幸せな気持ちが沸き起こりました。

いつかはこの生を全うし自然へと還り自然と一体化できる、せざるを得ない……そんな日を思い描きながら与えられた生命を燃やし続けているのです。山は山本来の姿で存在し、水は水本来の在り方で山から海に流れ、木は木の時間を生き続ける……そんな屋久島だからこそ当たり前の筈のことだけど日ごろは忘れていることを人間にもう一度再教育してくれるような気がします。人間は人間の背丈に合った生き方をしてその生を全うしなさいと屋久島で過ごした時間は私に教えてくれました。

今回のフィールドワーク講座で出会えたすべての生命体に心から感謝しています。ありがとうございました。

（萩原理恵子）

## Ⅶ　今後の展望

### A　山岳信仰の推進による自然に対する見方の変化

昔から行われてきた岳参りや、山の神様そのほか諸々の神々を敬う心、これは現代の社会において重要なことであると考えられる。アニミズムの精神を持つことによって自然に対する考え方や、とらえ方が変わってくる。いい意味でとらえれば、それは、自然を敬い尊重し大事にしていける精神でもある。ゆえにこれを今の社会に定着させることができれば人々はそれぞれの地域の自然をそれぞれが保護し、人と自然とが共生していけるような環境が作れるのではないだろうか。なんだか宗教的だけれど、今回のフィールドワーク講座でみんなと山で過ごした体験とともに、小さいときからの体験も思い出されて、それらを考え合わせてそう思った。

### B　昔の暮らしを見、また聴いて

石塚の集落では多くの人々がそれぞれの意思を持ち暮らしてきた。職を求めて集まった人、営林署から派遣された人、その妻や多くの子供、様々な人たちが深い森のなかで自然とともに暮らしてきたのである。彼らの暮らしは利便性に欠けておらず、当時としてはな

かなかいい暮らしをしてきたようだ。

彼らの暮らしを環境破壊だのなんだの言う人もいるだろうが、あれも一種の自然と共存していけるライフスタイルなのではないだろうか？現に彼らが去って数十年経った今では石塚の森は再生への途上にあって元の姿をとり戻しつつあるように感じられるし、小杉谷は杉の人工林が村跡を覆いつつある。これも彼らが村を去る際、残された森の姿を見て、石塚はそのままでも森が再生すると考え、小杉谷は植えた方がいいと判断して多くの木を植林していったからである。

彼らの暮らしが今の世の中に呼びかけることはなにか？それは昔からの伝統的な暮らし方をしっかり守っていく必要があるということだ。森を伐採したら後の世代のことを考えて、回復の大変な所には新しい苗木を植え世代更新をしていくといった考え方が自然とともに共存していく上での大切なことなのではないだろうか。そのような考えが広まることができれば、よりよい環境作りに役立てるのではないだろうか。

C　土埋木の今後の展望

土埋木は江戸初期から昭和までに切られた倒木や伐根のことを指す。その倒木や伐根は現在では工芸品の材料として重宝されている。しかしその残存量は年々減少してきている。今後、土埋木産業は伸び悩みが生じることが予想される。新しい土埋木が掘り出されなければ現在売り出されている土埋木の原価は高騰し、屋久島に出回る数が少なくなると思われる。現在、土埋木は地元の手にはほとんど入らず地場産業としての利益ではなく営林署または島外の大きい資本を持つ企業が買い占めてしまい売り手の利益となり地元に利益をもたらさないものとされている。今後、地元の利益になるように販売すれば、屋久島の産業効果は格段とあがり多大な経済効果をもたらすことができると考えられる。

D　全体の展望

自然を守るのも破壊するのも人間である。人間が自然と付き合っていくには、私たちが石塚や小杉谷の集落跡の森の回復に例を見たように、自然という相手のゆっくりとした時間の流れを尊重しなければならない。 そして歴史と伝統を守り、この素晴らしい自然を後世に残 していくべきだということを、しっかりと理解して、このフィー ルドワークで学習したことを自分達の地域に持ち帰り、自分達の地域でも何か守るべき重要なものはないかを考え、それを多くの人たちと議論し、交流し合い、将来の子供達が自分の住んでいる町を誇りに思えるような地域作りをしてほしい。

（荒田俊史）

## Ⅷ　まとめにかえて

屋久島ですごした一週間は出会いの連続でありました。

フィールドワーク講座の先生方、各地から参加した学生たち、私たちの班を石塚集落に導

引くださった上屋久町役場の木原幸治さんと塚田英和さん、また多くの陰ながらの暖かいご支援は忘れることのできないものでした。

屋久島を守る運動をされ今は雑誌『生命の島』の編集と発行をなさっている日吉眞夫さん、上屋久町の小杉谷出張所所長と郵便局長をされていた堀田優さん、石塚集落と小杉谷で営林署職員として働かれていた大脇耕治さんと日高秀麿さん、屋久島の杉を守る運動の中心となって活動されていた柴鐵生さんには、突然のお願いにもかかわらず長時間にわたって丁寧にお話をしていただき心より感謝しております。このような、さまざまな立場でいらっしゃる方々からお話を伺うことにより、「人と自然とのかかわり」を多数の視点から考えることになり、一週間では答えが出せず苦しい思いもしました。

また、人以外のモノとの出会いも私たちの心に強く訴えかけてくるものでした。

天の川まで見られる星空や、綺麗な海、澄んだ川、おいしい水、ヤクザルやヤクシカ、珍しい植物、渓谷、滝、森、山の中にある大山神社、土埋木、貯木土場、土埋木を加工している現場、そして石塚集落では宅地跡を修復するかのように二次林に成長した森、苔に覆われた家の基礎、当時そこにすんでいた人々が残した生活用品など、ありとあらゆる自然や動植物、人工物、そして目に見えない力、信仰に出会い、向き合うことになりました。

山の神にことわってから山に入り、土地は神から借りるものというのは、昔はあたりまえのことだったそうです。私たちはその伝統的な方法を安渓先生、塚田さんにならって山に入るときと出るときには山の神に挨拶をし、山のなかで一晩過ごすときはトチカイ（土地借り）という儀式を体験しました。儀式といっても簡単な挨拶のようなものでしたが、不思議なことに、こうすることによって山の夜の暗さなどからくる不安などが軽くなるような感覚がしました。

石塚集落へは荒川口から続くトロッコ道をたどっていくのですが、屋久島の山奥まで続くそのトロッコ道をつくってしまった人間の力に感心しました。屋久杉搬出の為の道をどんなに苦労して敷いたのか、そして屋久杉搬出の拠点としてつくられた山深い石塚集落や小杉谷集落で生活をしていく苦労など考えずにはいられませんでした。

石塚と小杉谷は昭和 35 年ごろに一番人口が多くなり最盛期をむかえましたが、石塚は昭和 43 年、小杉谷は昭和 45 年に、伐採と植林と森の成長のサイクルが合わず、伐採できる杉も少なくなり、また自然保護の運動が高まり、閉山することになりました。人と自然が共に生きていくことができなくなった結果であるように思います。

人類の歴史の中で人は自然と戦いながら人が生きていける環境を創り上げました。そして、文明はさまざまな形で人間に都合のよいものに進歩し、終には小さな人間が大きな力を持って、自然が森を創り上げてゆく速度よりも人間が森を奪ってゆく速度が上回ってしまったのです。短い時間を懸命に生きようとする人間と、長い時間をかけてゆっくりと成長していく森、破壊と修復の関係はくずれ、今日私たちは自然が受けきれなくなった自然に対する人類の活動による害は、大気汚染や酸性雨、異常気象や豪雨などに現れて、人類を含む地球上のありとあらゆる生命体に被害がおよんでいるのでしょう。

私たちは廃村調査をするために石塚に行き、一晩そこで過ごしました。約 35 年ほど前まではそこに人が暮らしていたのです。コンクリートで作られた家の基礎が残って植物が生えることの出来ない空間や、苔をめくるとその下からビニール製の袋がでてきて、苔は土に根をおろすことができずにいることを見ました。また、遺物として当時使用されていてゴミとなり放置された生活用品を数多く見つけました。自然破壊の痕跡を私たちは見たはずなのですが、私は人が住みよいと感じる場所ではないこんな山奥に人が生活していたことを、それらの遺物や遺跡から感じ、そこに住んでいた人々に感動をしました。

そして人がいなくなった今、石塚集落は二次林に成長し、森が再生しようとしていたのです。森に回復する力が残っていたことを嬉しく思いました。

人間の活動を否定することはできません。私も生きている以上環境破壊を毎日繰り返しています。でも、人は自然と共に生きているのです。屋久島の原生林を守る運動の中心となって活動されていた柴鐵生さんが「･･･僕らは瀬切の森が残ったのは僕らの努力としてやったそのおかげと思っていたけど、やはり森の力で突き動かされていたんだなぁと思ったね。森の遣い人としてね。結局はマスコミも、切る側の人間も、議員もみんな屋久島という大きな緑の中にいるんだよね。森は森自身の持っている力でギリギリ残ったと思うよ（詳しくはⅤ章参照）。森を残すエネルギーは屋久島の森から頂いたと思っています」とおっしゃられたことが心に残っています。

海の近くに住む人も、山の中に住む人も、農村に住む人も、高原に住む人も、もちろん大都市に住んでいるひとも、自然に生かされているはずなのです。自然を身近に感じられるか感じられないかの差だけであって、私たちが生きているのは水をつくる森があるからなのではないのでしょうか。

屋久島の森に入り、川の水や山の景色の美しさ、土埋木の大きさや、トロッコ道の脇を流れる水や、途中でであったシカなどにひたすら感動をし、また夜の山の中で火を囲むみんなの輪から少し離れると暗闇が私を包み、沢の流れや風が渡る音だけになり、森に飲み込まれてしまう感じとともに、このとき初めて森の中に居させてもらっている自分という存在をみたような気がしました。

この一週間、私たちは毎日真剣に「人と自然との関わり」について悩みました。私は一週間では答えがだせず、帰ってからも悩んでいます。班のメンバーもきっぱりとした答えが見つかったと感じている人はいないのではないのでしょうか。人間がこの地上で生きていく限り自然破壊行為がなくなるということはないのです。私たちはそれを最小限にくいとめ、自然が回復する手助けをしなければならないのです。しかし、今はまだ自然を奪っていく人間の行為と自然の回復のバランスはとれずにいます。さらに、私たちの生活は将来のゴミで埋め尽くされています。

もっと多くの人と共に「人と自然との関わり」を考えていけることを願っております。

（山口佳子）

写真１　大山神社に参拝して
写真２　森となった集落跡での実測
写真３　お話を聞いて

（この版の写真は削除してあります。）